7 （1990年4月～1992年3月）

人間関係原論　授業記録

〈第二グループの1〉

津 村 俊 充 （南山短期大学教授）

人間関係原論Ⅰの概要

前期

1990年度新入生は112名であり、人間関係原論Ⅰは必修科目のためすべての1年生が受講者である。

スタッフは、伊藤雅子、中堀仁四郎、大森正樹、津村俊充の4名が担当した。

人間関係原論Ⅰの授業は、学生が入学してくる4月前からのスタッフミーティングからもうすでにスタートしているといえるだろう。まず、第1回のスタッフミーティングは、1990年3月9日に行われた。そのミーティングでは、この人間関係原論ではどのようなことを扱っていこうとするのか、スタッフがそれぞれの思いを話し合った。その時に出された意見には、以下のようなものがある。

- 方向づけ（個々人の方向づけ・人間関係科の方向づけ）
- ここで考える（扱う）人間関係とは？
- 生きるということ
- 自分は何者なのか？どこに向かっているのか？
- 大学生になるというのはどういうことか？
- 学ぶとは？
- 学び方、そもそも学ぶということは？
- 体験学習とは？体験と経験とは？
- 読書、発表、討論
- 問題を自分で見つけて取り組むことへの援助

・学習方法（例えば、バズ学習など討議の仕方、模造紙を用いるなど）
・その時々に学生が受講している科目の中で学んでいることを統合したり、分解したりすることを助ける
・変化への気づき、学びへの気づきのサポート
・自分を意識的に変えてみること
・チェンジエージェントとは何か？
・共にいるとは？

などがあげられている。

次のスタッフミーティングは1990年３月１３日に行われている。スタッフミーティングの最初に、前回のミーティングであげられた一つひとつの項目についてディスカッションを進め、その後全体のアウトラインと前期のスケジュールの流れを決定した。

人間関係原論のアウトラインとしては、１年次には、一般的に「生きる」「考える」「交わる」などを身近な問題として取り上げる。特に、学習者自身が体験してきている教育の問題を掘り起こし、そこでの人間関係を考察する時をもつこととした。

２年次には、change agentに力点をおいた教育：「地の塩になる」「社会の一隅を照らす人」について考える時をもつこととした。

基本的な姿勢としては、学生が今自分にまた大学に期待しているものを大切にしていくこと、学生がどう考えているかを引き出しながら、人間関係原論のプログラム展開をしていきたいと考えた。

いわば、１年次前期は、「人間関係科で学ぶということ」、１年次後期は、「人間関係とは―生きるということ―」、２年次前期は、「人間関係とは―より人間らしく生きるということ―」、２年次後期は、「人間関係科で学んだこと・そしてこれから」といったことを大きなテーマにすることとした。

授業のねらいとしては、・人間関係科の教育を知る（体験学習・主体的協働学習）・学習共同体づくり・人間関係科の授業の統合の３つを掲げることにした。そして、前期授業の流れとして、４月期：高校から大学へ（自分の今を位置づける）、５月期：人間中心の教育（これまでの学校体験の吟味、人間関係科はどういうところか・何を大切にしているところか）、６月期：人間関係科とは（こんな歴史、こんなところ）、７月期：前期のまとめ（学びのための方法の提示、道具を使ってまとめてみる）

いわば、大学にやってきて学ぶとはどういうことかの吟味をすることから、人間関係科で学ぶことの各学習者にとっての意味づけをおこなうことを主眼に、前期はプログラムが構成されている。また、毎回の授業の終わりには学習ジャーナルとして今日一日の学びや気づきを言語化すると同時に、教員への授業などのフィードバックを記入することを求めている。そして、毎授業後にスタッフ

ミーティング（以下略称スタミと記す）を開き、こうした学生からのフィードバック情報を大切にしながらプログラムを組み立てていったのである。

第1回授業：まず、学習者が「互いに知り合い、学びの場に入る」というねらいで、次のようなプログラムを行った。画用紙を用いて(1)好きなもの（食べ物、音楽)、(2)うれしかったこと、悲しかったこと・苦しかったこと、(3)記入したり、話し合ったりしている間に気づいた自分のことなどを書き込み、それをもとにして、わかち合い。わかち合いは、各項目ごとにメンバーを変えながらシェアリングを行い、多くの仲間たちと出会う体験をした。その後、人間関係原論の位置づけとねらいについて小講義を行った。

スタミ記録から：学生には、当然ながら現時点で人間関係科での学習に対して、前向きなものとそうでないものとがいる。ただ、今日の作業を通して、何故ここに来ているのか？何を期待しているのか？を自らに問いかけるきっかけになっており、これまでの自分をふりかえる、特に教育体験をふりかえる時間になったようである。学生の中にはいろいろな人、特に初めての人と話をして話すことの喜びを感じたものと初対面の人と話をすることの苦痛を感じたものとがいたようである。また、これまでの教育の中で先生に言われたから勉強をしてきた、歩けと言われたから歩いてきたといった反応があったことも興味深いものである。

そうしたことより、さらに学生自身の教育体験を深く探っていくことにした。

第2回授業：「私の教育体験」を一人になって書き出してみる。その後、「学ぶということ」についての小講義を行った。

スタミ記録から：「私の教育体験」を書き出す作業時間としては短かったようである。これまでの学校教育の中での先生との関係の中で生まれた問題点や出会い・喜びが多く記述されたようである。それらは学生によってかなり異なる体験をしていることも分かった。また、自分自身の家庭教師としての体験から語られる記述も見られた。

以上のことから、学生相互に自分自身の教育体験を話し合う機会をもつプログラムを次回行うことにした。そして、課題としては、各グループ毎にしっかり分かち合い、その後グループ毎に「私たちの10大教育体験」として抽出することにした。

第3回授業：個人で前回の「私の教育体験」をラベルに書き出し、グループでそれらを話し合うことを通して、各グループごとに「私たちの10大教育体験」を取り出す作業を行った。

学生から出された10大教育体験を整理していみると、以下の２０に分類することができた。

A．先生自身の人間性などから学ぶ体験
B．先生の働きかけがやる気・勇気を与えてくれた体験
C．先生の影響で勉強が好きになる・嫌いになる体験
D．先生と生徒との関係を深める体験
E．先生のとった行動で傷ついた体験
F．仲間との人間関係の中での体験
G．高校教育からの学び
H．高校教育及び受験教育の問題
I．学校の成績による悪影響
J．管理教育による体験
K．校則に対する不満体験
L．体罰による体験
M．進学による環境変化
N．クラブ活動・生徒会からの学び
O．給食の体験
P．塾での体験
Q．自分の性格からみた体験
R．海外での教育体験
S．家族の生活（転校）が与えた体験
T．その他

スタミ記録から：学生が取り上げたかなりの数の体験は、先生との関係、先生のあり方から影響を受けたといったものが多かった。また、いいことよりも、いやな体験が多かったのが印象的であった。しかし、不快な体験の意味も、話し合っている間に分かったきた学生もかなりいたようである。また、グループのメンバーで話し合うことにはかなり興味を示しており、時間が足らないくらいであった。

今までの教育体験の中で、今自分が考えている教育観を探し出しながら、自分の理想の教育像を探り、「人間関係科で学ぼうとすることは何か」を明確にするプログラムに展開することにした。そして、10大教育体験が先生から教え込まれた体験、それは一方的な教育が教育であるといった視点から、さらに広がりをもって学習者がともに学ぶ教育の見方も養っていきたいと考えたのである。

第4回授業：この後、予定では、5月期の第2ステップに入ることになるが、これまでの授業のまとめてとして、グループで書き出した10大教育体験に再度目を通し、それから気づいたことをメモするといった個人作業の時間を設けた。また、スタッフから「これからの原論の方向を探るために」と題して、これまでの授業を通して気づいたことや感想を話した。

スタミ記録から：学生の反応としては、「充実していた」、「いまいち話が分からなかった」、「させられたけど学んできたのだな」、「たくさんあって、面白かった」、「一方的に悪い体験と思っていたけど、それにも意味があるのだなと思った」など、さまざまなものがあった。最後のスタッフからのコメントの中で一方的に受動的な教育体験、影響体験だけでなく、その中でも自ら選択していることがあることなど、学習者自身の『責任性』の問題にまで触れたことは意味があったように思われる。

その後は、これから学習を進めていく人間関係科についてより深い理解ができるようなプログラムを組み立てることにした。

第5回授業：1ヶ月あまり人間関係科で学習を進めてきて、よく耳にする言葉「人関用語」、よく使った学習道具「人関の道具」を手がかりにして、人間関係科の教育を考えていくことにした。また、スタッフから「人間関係科の成り立ち」についての話も行った。

スタミ記録から：「人関が少し見えてきた感じがする」、「用語・道具の整理でそのユニークさが分かってきた」、「頭で分かるのと心で分かるのとでは違うのではないか」、「自分の将来はどうなるのだろう？」、「人関はつかみどころがないから、もっと具体的な学ぶことをやってほしかった」、「人関の授業に参加していると疲れる」などの学生のさまざまな反応があった。また、後半の人関の歴史を聞いて多くの質問が生まれ、そのことに答えることで授業が活性化したし、学生の理解も深まったであろう。

さらに、人間関係科はどういうところかを知るために、個人毎に書き出されたシートを用いてグループ作業としてグループ毎に話し合いを行うことにした。このことで各自が人間関係科で学ぶことの動機づけを高めることをねらったのである。

第6回授業：人間関係科の教育で大切と思われる用語を7つのグループで話し合って模造紙に書き出す作業を行った。

第7回授業：人間関係の教育で大切と思われる道具7つをグループ毎に持ち寄った個人のデータをもとにして模造紙に書き出す作業を行った。

スタミ記録から：「用語と道具を分けなくてもいいのではないか」、「話し合いが真面目にできませんでした」、「話し合いが前よりもよくできた。」、「スタッフが何を7大道具と考えているのか知りたい」などの意見が学生から出されている。また、2ヵ月足らずの間にもずいぶん学生は人間関係科のことを理解しており、「本当に学ぶことができる大学に来た」といった実感をもっていることも分かった。

第８回授業：「人間は何を目指そうとしていたか？そして今…」を明示するために、現在の人間関係科スタッフ２名（山口・樋田）と創設期のスタッフ２名（大庭・吉川）に協力を求め、パネルディスカッションの形式で学生に語りかけ、学生からの質問に答える授業を行った。
スタミ記録から：「人間らしく生きる人間の根本が分からない」、「個人が尊重された教育をしてみたい」、「今日の話で前向きになれそう」、「体験学習で踏込まれることは嫌です」などさまざまな意見が出されている。その中で、比較的ネガティブな反応を考えると、人間関係科の中で中心になっているものが明確に伝え切れなかったのではないか、また教育理念と教育方法を整理してみる必要があるのではないかなどの意見がスタッフミーティングで話された。一方で、疑問に感じたりしていることを教員に伝えることができていること、またその疑問から新しい視点や動機が生まれてくるのではないだろうかと考えた。

第９回授業：人間関係科での自分の学びを方向づけるために、また人間関係科を異なる視点から理解するために、人間関係科とは異なる教育現場を見てみることから、共通性と異質性を探ることを考えた。そのために、授業の導入時には人間中心の教育およびカウンセリング的人間観の視点からの話を行い、アメリカの教育事情をＶＴＲで観ることにした。
スタミ記録から：時間が足りないぐらい、ＶＴＲを観てからの個人メモはかなりたくさんの記述を学生は行っていた。その中では、学ぶこと・生きることへの自由と責任の問題について触れている学生が多かった。そして、同時に現代日本の管理教育の現状と問題について疑問を投げかけている学生もいた。

第10回授業：アメリカの自由な教育を観たことから、自由な教育が大切であること、そして何もしないことがいいのだと短絡的な思考に走りがちなところを懸念した。そこで再度新しい視点を提供することを意図して、今回は、教育における環境のもつ意味を考えるために、「発達と教育」というテーマで講義を行った。内容は、母子関係の誕生から人間として成長していく過程での環境のもつ意味を講義し、ＶＴＲでは「猿の母子実験」の映像を観ることにした。
スタミ記録から：猿の強烈な母子分離の実験の映像は学生たちには衝撃的であり、また突然動物実験の話になったのを興味深く観たものと全く今までの授業内容と切り離された形でしか観れなかったものとがいたようである。そのため、次回は教育の原点にもどり、「人はなぜ学ぶのか」を哲学の視点から講義することにした。

第11回授業：「人はなぜ学ぶか」を哲学の観点から、特にソクラテスの話「徳（＝善）は教えられるか」、「対話術」、「産婆術」の話、次いで、キリスト教の観点から、「旧約聖書」の「創世記」をモチーフに人間になることの講義を行っ

た。
スタミ記録から：「話がよく分かった」という学生から「なぜ、宗教なのか結び付けられなかった」という学生までさまざまであったが、中には「先生方も私のソクラテスになってください」といった意見までジャーナルに書かれていたものもあった。

第12回授業：前期最後の授業ということで、「前期のまとめ及びこれからに向けて」というねらいで、これまでの人間関係原論の授業をふりかえるプログラムを行った。それは、今まで何をしてきたか、その中で自分はどうあったか、自分にとって原論は何であったかを一人で考察する時間をとったのである。

Ｂ４の用紙に大きくは２つの設問が書かれているもの（①これまでの資料を検討し、次の事柄について、どのようなことを学んだかを書き出してみる――人間、主体、体験学習、教育、生きる、人関教育、学ぶ、今までの教育体験etc.――、②自分が学びたいこと）に対して、一人になって考えてみる作業を行った。
スタミ記録から：かなりどちらの項目に対しても、深い考察を学生たちは行っていた。現時点での学生一人ひとりなりの今学んでいることの原理・位置付けなどが行われたようである。また、今までの自分をふりかえると同時に、自分のもつ動機・ニーズを把握する試みが行われていた。

後期

第13回授業：夏休みもあけ、後期の授業が始り、人間関係原論も新しい気持ちで人間関係科での学びをスタートすることができるようなプログラムを検討し、実施した。内容としては、前期の授業をふりかえり、私にとってどういう意味があったのか、人間関係科での授業などをマップ（地図）に表わしてみること、そして数名のグループで分かち合うことを行った。
スタミ記録から：「時間的にもう少しあると良かった」、「ＫＪカードを用いて画用紙上で動かせたのが良かった」、「導入時に、前期に提示したねらいを再度説明したり、前期の授業を思い起す作業を行ったのが良かった」など、プログラム実施上のふりかえりの意見が出されている。また、マップには、結構フィールドワークの授業が中心的な位置に配置されていること、また、キリスト教概論の授業が「私」の位置に近づいているように感じられたことも印象的であった。本授業（人間関係原論）の位置づけは、学生によってかなりばらつきが見られた。

第14回授業：「生きる」ということをholisticなとらえ方をしてほしいと思い、また私たちは知的に生きているだけではなく、「人はパンのみにて生きるにあ

らず」と言われるように、人間のもつ態度価値まで問うことができるようなプログラム展開を考えた。本当に生きているといった実感がどのような時、どんなふうにもてるのかをスタッフと共に考えていこうとした。そのために、まず、モリスの１３の生き方を資料として渡し、学生が１３のそれぞれの生き方を読んだ後、学生自身が各生き方に対して命名することを行い、その後で自分自身はどのような生き方をするのかを考え、３人組で分かち合うという授業を行った。
スタミ記録から：名前を付けるのはそれぞれ興味深くやっており、名称も面白かった。また、課題が学生にとって新鮮であったようである。ただ、話し合いに基づいてのジャーナルに記述されている今日の気づき・学びをもう少し掘り下げて考えることができればよいだろうという意見がスタッフから出された。それには、自分自身の生き方にしっかりと問いかける時間と問題意識が必要なのであろう。

第15回授業：前回のふりかえりから、モリスの１３の生き方をもう少し深く理解することができ、自分自身に問いかけ、自分で考えてみる作業を行おうとした。具体的には、それぞれの生き方をサポートする１３のグループをランダムに（学生一人ひとりがかならずしも、自分が望んでいる生き方のグループには入いらない）作り、各グループから代表者を出す形でディベート形式でディスカッションを行うことにした。そのために、今回はグループ作りと、各グループに与えられた生き方についての賛否を考え、その生き方を支持する意見を話し合うことで次週のディベート形式のディスカッションへの準備を行った。
スタミ記録から：１グループのメンバー数が９名ほどになり、少しグループ内で話し合うにはグループサイズが大きかったようである。どうしても自分とは異なる生き方が割り当てられたメンバーはその生き方を支持するような意見を幅広く拾い出すことが難しいようであった。そういったことからも逆に、自分と異なる意見をサポートするような視点から考えてみる、今回のようなプログラムは大切になるのだろう。

第16回授業：前回の準備をもとに、今回は実際にディベート形式でパネルディスカッションを試みた。ディスカッションには各グループから代表者が１名ずつ参加するが、交替はいつでもＯＫというルールで行った。
スタミ記録から：全員発言するチャンスはあり、活発なディスカッションが行われた。書いている時よりも、討論することで熱が入り、時間が足りないほどであった。発言の時間制限を設けたのだが、ゆっくり話す学生には少々時間が短かかったようである。何も言えなくて、敗北感を感じているような学生は少なかった。こうしたディスカッションを通して、学生たちはいろいろな生き方に揺さぶられたようである。

第17回授業：今回の授業から、フェイズを変え、自分自身の日常の生き方、そしてこれからどのように生きていくかを考えるプログラムに展開していった。それは、「これまで・今・これから」の生き方を考えていく作業であり、そのことを通して、これまでの生き方に囚われすぎずに新たな自分の生き方を模索していくことをねらったのである。それは、閉ざされているのではなく開かれながら生きていくことを考えてみようという意図のもとで行われた。すなわち、生き方は自分自身が選び取るのであり、生きることそのものが人間関係であることを意識することにもなるであろうと考えたのである。

具体的なプログラムとしては、この回から続いて1年次の最後までの5週間を用いて、「人生設計」のプログラムを展開することにした。まず、第1回目として、自分のこれまでそしてこれからの「ライフライン」を描いてみることから始めた。そして、自分が大切にしているものは何かをリストアップし、それに順位づけを行った。

スタミ記録から：やり始めるまでは少し時間がかかったが、スタートするとかなり集中してやっていた。大切なもののリストアップはできても、それらに対する順位づけは難しそうであった。２０年足らずの人生だけれども、その節目節目に大切な出来事を書き出すのは楽しくもあり、懐かしくもあるようであった。将来についての描写は、面白く興味をもってやれた学生とわからないといった学生もいた。

第18回授業：物理的な時間と心理的な時間を意識してみることも意図して、具体的に1日をどのように過ごしているかを考えてみることにした。まず、具体的な一日の生活を書き出し、そこで生きている自分が前回リストアップした大切にしていると記述したこととどのような関連があるかを検討した。

スタミ記録から：結構学生の反応は興味をもって参加できたとのことであった。今の自分の忙しさを受け入れている学生、本当にこれでいいのだろうかと問い直し始めた学生などがおり、学生には刺激的なプログラムになったようである。また、学校とアルバイトに追われてしまっている自分を発見したり、アルバイトをしている時の自分の心の動きなどは時間に追われ、ただ消費しているだけでその時の自分を記述することが難しい学生もいた。

第19回授業：「私の世界」の広がりをテーマにプログラムを組むことにした。自分は、どんなところで、どんな人と出会いながら生きているのかを検討してみたのである。白紙の上に自分が今生きている世界を描き、その中に自分が大切にしていることや大切にしたいことを書き込むようにした。

スタミ記録から：プログラムとしては時間が足らなかった。学生の反応として「自分の世界の狭さを知った」といったものもあった。ただ、自分の世界の広がりの中に大切なものを書き入れたことで、空間の広がりが無くなってしまっ

たようである。

第20回授業：自分のこれからの生きる世界を広げていくこと、またこれからの生き方を考えるために、「生きる」ことと対照的に「死」という問題を取り上げることにした。いわば、死の教育(death education)で考えられているように、いかに死を迎えるかを考えることでいかに生きるかを問い直そうとしたのである。

自分自身が「死」をどのように位置付けているかを考えてみる。具体的には問①これまでにあなたが死ということを身近に考えたりした時は？問②そこで死についてどのように考えたか？といった問に答えることを学生はしたのである。また「死」を考える時に、「生」を真剣に考えるのではないかといった前提に立って、「あなたが半年しか生きられないとして、どのようにこの半年を生きるかを書いてください。」という問いかけから生きることを考えたのである。

スタミ記録から：スタッフが授業の初めに話をしたこと、「自分が自分自身をどのように捉えるかといった自己概念のありようが生き方を変えるかもしれない」という話を興味深く学生は聞いていた。自分にとっての死、自分の周囲にとっての死についてこの授業でよく考えたようである。

第21回授業：人生設計のプログラムの最後として、また１年間の人関生活の締めくくりとして、この１年間で自分がよくやったと思うことを書き出し、分かち合うことで自分自身を労うプログラムを行った。そして、後半は、分かち合いをしたメンバーに対してクリスマスカードを作成し、カード交換を行った。

スタミ記録から：授業の導入で、目を閉じて１年間を思い起す時をもったのは良かった。学生は興味深く取り組んでいた。また、カードもいろいろ工夫がほどこされ、相手が自分自身を認めてあげたいと言っていたことを受け止め、そのことを労い励ますプレゼントカードになっていたようである。

第22回授業：１年間行われた人間関係原論Ｉの授業の最後ということを意識し、また１年生から２年生への橋渡し的な役割も意図して、プログラムは計画された。これまで授業で扱ったメモとプリント類が挟まれたファイルを読み直しながら、私にとっての人間関係原論は何であったかを考え、レポートをする時間をとった。しっかりと自分が得たものを書き込み一年間のまとめとして残す作業が大切であると考えたのである。

スタミ記録から：実質６０分あまりであったが、かなり集中して作業を行っていた。一斉に集って、各自レポート作成をするということであったが、仲間がいることで集中しにくい学生もいるが、かえって短時間でともに同じ作業をすることで集中力を増すことができたのではないかと考えている。

１９９０年度人間関係原論Ｉ

年間スケジュール

前　期

日付	ねらい	やったこと
1．4／12	・互いに知り合いはじめる ・新しい学びの場に入る	＊互いに知り合う（マイクロラブ）「私の窓」 ＊「原論の位置づけとねらい」についての話 ＊ジャーナル記入
2．4／19	・今までの教育体験の中で、自分が何を得てきたかを探り、主体としての自分の学びの方向づけの基礎とする。そのＩ	＊「私の教育体験」を一人になって書き出す ＊小講義「学ぶということ」 ＊ジャーナル記入
3．4／26	・今までの教育体験の中で、自分が何を得てきたかを探り、主体としての自分の学びの方向づけの基礎とする。そのII	＊グループ作業 課題：「これまでに各自が出会ったことをグループで分かち合う」 手順：1)先週書いた「私の教育体験」を読み個人でラベルに書き出す。 2)グループでラベルをもとに話し合い、「私たちの10大体験」を選ぶ。 3)全体で発表し、分かち合う。
4．5／10	・今までの教育体験の中で、自分が何を得てきたかを探り、主体としての自分の学びの方向づけの基礎とする。そのIII	＊グループで書き出した、10大教育体験をみて、各自で検討、気づいたことをメモとして書き出す（個人作業） ＊「これからの原論の方向を探るために」スタッフからの感想・コメント
5．5／17	・人間関係科はどういうところか、人間関係科で大切にしていることを知るＩ	＊人関用語、人関の道具の検討「私の考える人関用語事典」 ＊「人間関係科の成り立ち」スタッフから紹介 ＊ジャーナル記入
6．5／24	・人間関係科はどういうところか、人間関係科で大切にしていることを知るII	＊グループ作業 課題：「グループで人関の教育で大切と思う用語を７つ選び出し、それを模造紙に書き出す」 このグループ作業をすることのねらい： ・今の時点での人関理解を深める ・話し合うことで自分の人関への参加の位置を知る ・自分が人関で学ぶことの動機づけをする ・グループで共に作業をする中で学ぶ ＊ジャーナル記入
7．5／31	・人間関係科はどういうところか、人間関係科で大切にしていることを知るIII	＊グループ作業 課題：「グループで人関の教育で大切と思う道具を７つ選び出し、それを模造紙に書き出す」 ＊ジャーナル記入

日　付	ね　ら　い	や　っ　た　こ　と
8．6／7	人間関係科はどういうところか、人間関係科で大切にしていることを知るⅣ	*「人関は何を目指そうとしていたか。そして今……」 司会者：津村俊充 お話：大庭征露、吉川房枝 賛助出演：山口真人、樋田大二郎 *ジャーナル記入
9．6／21	・人関での自分の学びの方向づけをするために“教育とは何か”を考えるⅠ	*ねらいの説明 *「アメリカの教育」をビデオに見る *各自で考え、メモをする *ジャーナル記入
10．6／28	・人関での自分の学びの方向づけをするために“教育とは何か”を考えるⅡ	*ねらいの説明 *「環境としての教育」 *各自で考え、メモをする。後で、3人組で話し合う。 *ジャーナル記入
11．7／5	・人関での自分の学びの方向づけをするために“教育とは何か”を考えるⅢ	*ねらいの説明 *講義「人はなぜ学ぶか」大森正樹 *ジャーナル記入
12．7／12	・これまでの人間関係原論の授業をふりかえる	*「ねらい」と「課題」の説明 *一人になって作業 *レポートの課題の提示

後　期

日　付	ね　ら　い	や　っ　た　こ　と
13．10／4	・新しい気持ちで、人間関係科の学びを始める	*「私の人関授業マップ」 課題：前期の授業をふりかえり、私にとってどういう意味があったのか、マップに表してみる。 手順：一人でマップ作成 小グループでわかちあう ジャーナル記入（マップを書いてみて私が発見したこと）
14．10／11	・人間関係の根本的問題“生きる”に目を向ける ・「モリスの13の生き方」を使い、自分の生き方をさぐる	*「モリスの13の生き方」 手順：1）資料を読む 2）13の生き方に名前をつける 3)-①今の自分に近い生き方を選ぶ ②これから自分がどのような生き方をしたいかを選ぶ 4）3人グループで分かち合う 5）一人になって（ジャーナル記入）

日付	ねらい	やったこと
15. 10／18	・自分の生き方の形成に向けて、様々の生き方をさらに深く理解する。 ーモリスの生き方を手がかりにしてーそのⅠ	グループ作業 課題：グループで“生き方”について話し合う 手順：グループ作り、担当する「生き方」割り当て グループで次回のパネルディスカッションのための準備 ①グループの担当する生き方にタイトルを付ける ②次回のパネルに向けてその生き方を支持する意見、またその生き方、具体例等を話し合い、その準備をする。役割・進め方等も相談しておく。
16. 10／25	・自分の生き方の形成に向けて、様々の生き方をさらに深く理解する。 ーモリスの生き方を手がかりにしてーそのⅡ	＊円卓方式でのパネルディスカッション： 司会　大森、津村 各グループの代表により （途中で代表は交代してもいい） ＊小レポート「私の生き方」
17. 11／22	・私の人生を設計してみよう ・自分自身をより深く知り、これからの生き方を考える(Ⅰ)	＊実習「私の人生？ー今までは、これからはー」 1）ライフライン 2）自分が大切にしているものは
18. 11／29	・私の人生を設計してみよう ・自分自身をより深く知り、これからの生き方を考える(Ⅱ) ・自分に与えられた時間をどう生きているか	実習「私の一日」 1）具体的な一日の検討 2）自分が大切にしているものと時間
19. 12／6	・私の人生を設計してみよう ・自分自身をより深く知り、これからの生き方を考える(Ⅲ) ・自分の世界の広がりは……	＊実習「私の世界」 1）私の世界を描く 2）気づいたことをメモ 3）わかちあい ＊ジャーナル記入
20. 12／13	・私の人生を設計してみよう ・自分自身をより深く知り、これからの生き方を考える(Ⅳ) ・死から生を考える	＊実習 1）あなたの中で「死」をどのように位置づけているか（メモをする） 2）「死」から「生」を考える（小文を書く）
21. 12／20	・私の人生を設計してみよう ・自分自身をより深く知り、これからの生き方を考える(Ⅴ) ・自分をねぎらう	＊1）この一年で褒めてあげたい ・一人になって、自分がよくやったと思うことを書き出す ・グループ作り（2人または3人組） ・分かち合う ＊2）クリスマスカード作り ・カードの作成 ・交換 ・一人になってそれをじっくり受けとめる
22. 1／10	・私にとっての原論の位置づけをする	

人間関係原論Ⅱの概要

前期

１９９１年度人間関係原論Ⅱでやったこと
テーマ：変化　―より自分らしく（人間らしく）生きるために―

１年生の前期には「人間関係科を知る」とういことをテーマにさまざまな視点から教育・人間関係・人間関係科について考えた。また、後期には「“生きる”とは」ということをテーマに自分自身がどんな生き方をしているかを考察するプログラムを展開した。また、学生の最後のレポートから、印象的な意見として「自分について新しい発見ができた」、「他者のことをもっと考えたい」、「生きるということの根本的なことを学びたい」、「自分について考える時間があった」、「自分が信じられない」などが、人間関係原論Ⅱのスタート前のスタッフミーティングで出された。

そして、そうした学生のニーズも考慮しながら、２年生の前期は、人間関係科の教育の一つの目標である「change agent（変革体）とになる私」をテーマにプログラムを作っていった。特に、そのテーマの中にあって、「変わるのは誰か？」、「一人ひとりの違いをどう生きるか？」、「現代社会を考えた場合、押し流されそうになる力にどう対抗するか？」、「私にとって変化とはどういうものか？」などを考えていくことができるように意図したプログラムを検討したのである。また、同時に人間関係科では何を学んでいくところかも深く考察できることを期待した。

人間関係科での生活の最後にあたる２年生の後期の人間関係原論Ⅱの主要テーマは、「人間関係科でみんながどう生きたかを瞰る」ということで、人間関係科での各自の学びの総括と同時に、学びあった仲間たちとの関わりの再確認、さらには卒業後のこれからに向けて考えるプログラム作りを行っている。

一年次の人間関係原論Ⅰは、毎週１コマ（90分）を前・後期通して行ったが、二年次の人間関係原論Ⅱは２コマ続きの授業が可能になるように時間割が組まれている。そのため学生の状況にあわせながら原論Ⅱの授業の期間を自由に設定することができている。

第一段階　「より人間らしいとは、より人間社会らしいとは」を問う

５月17日：グループ作業：「より人間らしいとは、より人間社会らしいとは何かを人間関係科の授業で取り組んだことを基にして問う」

５月24日：グループ作業：前回と同じ課題に取り組む。グループでレジュメを作成
レジュメの内容・授業との関連で具体的データ「自分たちの考える人間らしいとは」と「作業を通して気づいたこと」を記述してみる

5月31日：グループ発表：二つの教室(No.11 & No.21)で発表
ホームワーク：自分の生まれた日、小学校の一年生の誕生日、中学一年生の誕生日の新聞を手がかりにして当時のことと今とを比較検討してみる。

第二段階　自分は変化をどう経験しているかをさぐる

6月7日：自分の身の回りでどのような変化が起こっているかを捉える
グループで新聞資料を出し合い、どのような変化をそこに見ることができるか、模造紙に書き出す
ホームワーク：資料を参考にし、自分の身の回りの変化を書き出す（個人で）

6月14日：グループが書き出した模造紙を展示し、全員で眺める
個人で、先につくった表を参照しながら、自分の中の変化を書き出す
グループで、各自がホーム・ワークで書き出したものを説明し分かち合う
課題　小レポート「私は変化をどう経験しているか」

第三段階　「自分は変化にどう向うか（いかに生きるか）」を問う

6月28日：変化に向う自分は……[Ⅰ]
①ひとりになって、自分の気に掛かることを取り出して、それについてどのように自分はしているか、そこで得ているものは何か？そこで失っているものは？などを書き出してから、3人のグループで話し合うことで自分自身のありようを探る
②望んでいるようになるためには自分は何ができるか？を探る
③幾つかの行動の可能性の中から、具体的に自分が行うものとして一つ選ぶ。

7月5日：変化に向う自分は……[Ⅱ]
スタッフの話し合いによるプレゼンテーション
「原論Ⅱの前期で何に取り組んできたのか」総括をする

今期最終課題：「①私がこの原論で学んだもの、②残りの学生生活をどう生きるか」をテーマにレポートを書く。

前期のふりかえり（スタミ記録）から

- 変化には「変わる」、「変える」、「変わってしまう」などがあるだろう。
- 学生たちは受け身的でどうしても変わることの恐さを感じているようである。
- 影響を与えている存在としての自己よりも、影響を受ける、与えられる存

在として認知しているようである。

- 自分で選択すること、選択していることをもっと意識化する必要があるだろう。
- また、自分のやっていることへの値打ちの評価をもっとしっかりしてほしいと思う。
- 回数はこれでギリギリな感じがした。
- ２コマ続きはプログラム上やりやすかった。
- 変化については、学生にどのぐらい伝えられたか分からない。
- 「変化」は大きな問題であり、授業としてこなしきれなかった感じがしている。
- 「変化」ということで捉えても、「生きる」ということで捉えても基本的には同じではないかと思った。
- いろんな出会いを自分で選んでいくようになってほしいと考えた。
- 今何か変化していることを意識することはできるようになったのではないか。
- 学生はいつも変化が起こっていることに気づいたのではないだろうか。
- 自分はどう生きるのか？自分が生きることでもたらす変化に気づくことも大切だろう。
- スタッフミーティングを通して、スタッフのそれぞれの考えが出されたのは良かった。
- 第一段階は、グループ討議で２年生になって、久々の人間関係科らしい授業を学生は意識したのではないだろうか。
- 第二段階は、興味があった人たちとなかった人たちに二分できるのではないだろうか。
- 第三段階は、もう少し少人数で深く扱えると良かったのかもしれない。

以上のような、前期授業における学生の状況について、スタッフ間で意見交換を行った

後期

後期は、２年間を半期ずつに分けると、第Ⅳ期に入る。そして、卒業を控えた半期でもあり、以前行っていた「卒業合宿」に代わる働きをする授業展開も考慮に入れたいと考えた。そのために、この２年間の人間関係科での生活で、何を学び、何を身につけたかを問いかけるようなプログラムを検討・実施していくことになった。

また、前期取り扱った「変化」というテーマも大切に扱い、関連づけながら第１回目の授業の導入と展開を考えた。その結果、人間関係科での生活で自分が学んだこと、学びたかったこと、身につけたかったことを学生たちに自由記

述の形でリストアップをしてもらい、それらの項目を整理・統合することを試みることにした。そして、最終的には、自分にとって意味のある項目を拾い出し、それらの項目をもとに自分自身を評価してみることにした。また、その評価の形としては、「私の通知簿」という形で創造的な活動も導入することにした。この活動を通して、自分が何を大切にしているのか、価値観、自分の中の基準を明確にし、過去・現在、そして、社会に出てからのこれからの私の生き方につないでいくことを考えたのである。

後期のプログラムは、以上のことを実現するために、展開していった。また、１８期生としての学習共同体、また共に学んだ証作りといった思いも込めて、授業の最後には「１１１名の人関生活」といった自主製作のビデオ作りにも挑戦した。

具体的に、学生から出された「私の人関での気づき・学び」は２００項目以上にわたる記述が出された。それらをスタッフが、冗長な項目を取り除き、最終的には１７３項目にして、それらを１項目１カードの形にして学生に再提示し、学生はそれらを２つの方法で評定を試みた。一つは、山分け法で類似の項目だと思われるものを同じに島に分類する方法、もう一つは、自分にどれぐらいあてはまると思うかを７段階で評定するものであった。その評定データを用いて、多変量解析を試み、最終的には、２０因子の抽出を行っている。学生に、再度それら２０の因子の項目群を提示し、学生はそれらに自分なりの命名を試みた。そして、それらの２０因子と、自分なりに意味のあると思われる評価基準を加えて、「私の通知簿」の作製を行ったのである。できあがった「私の通知簿」は、人間関係科の全スタッフの協力を得て、学生一人ひとりと面接を行い、２年間の私について学生が教員に語る時間を設けたのである。

１９９１年度人間関係原論II

年間スケジュール

日付	ねらい	やったこと
1．5／17	・“より人間らしいとは…”I “より人間らしいとは…”何かを人間関係科の授業で取り組んだことを基にして、問う	＊社会行動の調査 ＊今期のねらい、今日のねらいの説明 ＊グループ分け：フォースドチョイスによる ＊グループ作業：課題の説明 ＊グループの状況の報告 ＊ジャーナル記入

日付	ねらい	やったこと
8．11／22	人間関係原論Ⅱ（後期）で取り上げるテーマ： “111名の人関生活” ……みんながどう生きたかを瞰る…… 『私が生きる』 日常生活の中に意味を見つけるために	
9．11／29	・“みんながどう生きたかを瞰る”そのⅡ ・評定のデータ化	＊評定のデータ化
10．12／13	・“みんながどう生きたかを瞰る”そのⅣ ・全体を見ながら自分の学びの内容や、その意味を見つけ出す ・通知簿（自己評価）つくりの準備をする	＊グループで宿題のシェア ・自分のプロフィールの報告 ・メンバー間のプロフィールの比較 ・個人でメモ ＊通知簿つくり（I） 課題の提示（別紙）
11．1／10	・“みんながどう生きたかを瞰る”そのⅥ ・指導教員との通知簿の分かち合い ・ビデオ「111名の人関生活」つくり	＊内容：二年間の人関生活を表現する 方法：ビデオに撮影。表現の方法は自由。（一人３０秒以内） 準備：各自で人関生活を思い起し録画の準備をする 撮影：準備ができた人から録画 ＊指導教員との通知簿の分かち合い ＊ジャーナル記入
12．1／24	・“みんながどう生きたかを瞰る”そのⅦ ・ビデオ「111名の人関生活」つくり	＊ビデオ「111名の人関生活」撮影つづき ＊ビデオ「111名の人関生活」を見る

◎後期　レポート課題

通知簿をもとにして、

『この２年間をどう生きたか、そしてこれからをどう生きるか』

期限：１９９２年１月３０日（水）午後４時３０分まで

枚数：南山短期大学原稿用紙５枚以上

提出先：人関事務室　自分の通知簿と合わせて提出のこと

日付	ねらい	やったこと
2．3． 5／24 &31	・“より人間らしいとは…”Ⅱ “より人間らしいとは…”何かを人間関係科の授業で取り組んだことを基にして、問う	＊グループ作業の継続 ・グループの話し合い ・レジュメ作成B4・1枚 必要な内容 ・授業との関連で具体的データを列挙 ・それを基にして自分たちの考える人間らしいとはを文章化する ・この作業を通して気づいたこと ＊ジャーナル記入
4．5／31	・“より人間らしいとは…”Ⅲ “より人間らしいとは…”何かを人間関係科の授業で取り組んだことを基にして、問う	＊発表準備 ＊グループ発表 ＊ジャーナル記入 ＊「ホーム・ワーク」提示
5．6／7 6／14	・自分は変化をどう経験しているか ・自分の身の回りでどのような変化が起こっているか捉えてみる	＊グループで新聞・資料を出しあう ・新聞のコピーを作った時の感想を分かちあう ・個人で自分の持ってきた資料から出来事を拾い出す ＊書き出した新聞記事から「どのような変化を見るか」、データをお互いに補い合い、模造紙に書き出す ＊ジャーナル記入
6．6／28	・変化に向う自分は・・・(I)	＊自分の身の回りの気にかかること ＊どのようなかかわり方があるか？ ＊その影響は？ ＊ジャーナル記入
7．7／5	・変化に向う自分は・・・(II)	＊ねらいの提示 「原論Ⅱの前期で何に取り組んできたかを総括する」 ＊スタッフ3人の話し合いによるプレゼンテーション （フロアからの質問、コメント、などによる参加を期待する）

◎前期　レポート課題

・私がこの原論で学んだもの

・残りの学生生活を私はどう生きるか

上記の点をふまえて、レポートを作成する

締切：１９９１年7月１９日（金）１６時１０分

枚数：南短原稿用紙５枚以上